

令和7年度 第1回 横浜市民ギャラリー選定評価委員会 会議録

1 日 時 令和7年8月28日（木） 10時00分～12時19分

2 場 所 横浜市役所 18階会議室

3 出席者 垣内 恵美子 委員、河原 啓子 委員、竹森 順一 委員、西田 由紀子 委員

4 欠席者 無し

5 傍聴者 無し

6 議事内容

議題	1 委員長の選任 2 定足数の確認 3 委員会の公開・非公開 4 議題：令和6年度業務評価
議事・委員意見等	1 委員長の選任 委員の互選により、垣内委員を委員長に選出した。 2 定足数の確認 委員数4名のうち4名の出席により定数を充足しており、会議の成立を確認した。 3 委員会の公開・非公開について 横浜市の保有する情報の公開に関する条例第31条及び横浜市民ギャラリー指定管理者選定評価委員会運営要綱第9条に基づき、「議題：令和6年度業務評価」の審議については公開とした。 4 議題：令和6年度業務評価 (1) 評価関係資料について ア 評価資料及び評価方法の確認 事務局から、評価に使用する資料、評価方法について説明があった。 イ 指定管理者業務実績及び自己評価について 指定管理者から、令和6年度の事業報告及び収支決算について、実績及び自己評価についての説明があった。 ウ 行政評価について 行政評価シートに基づき、事務局から行政評価について、要点の説明があった。 (2) 指定管理者へのヒアリング、評価・改善点の説明 委員から指定管理者に対する質疑及び評価内容（評価する点、更なる取組を期待する点）の説明を行った。

	<p>ア 「使命1」及び「使命2」について</p> <p>(ア) 質疑(以下「・」は委員、「⇒」は指定管理者)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・U35の選出はどのように行われているのか。 <p>⇒ U35の企画は2020年度から始めているもので、これまでの実施状況としては、最も多い年で3件を採択したことがある。通常は1件から3件程度を選出して実施している。選出にあたっては、応募内容の質や実現可能性を踏まえた選考を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SNSの情報発信の頻度については。 <p>⇒ 展覧会はオープンした当日に写真を撮って紹介、主催事業は展覧会期間中ほぼ毎日更新を目指している。準備段階から情報発信を行い、事業レポートや参加者募集も隨時配信している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・展覧会の企画内容や実施方法について <p>⇒ 展覧会については、企画の意図や構成、来場者の反応などを踏まえて実施している。地域との連携や多様な鑑賞者層への配慮も行っており、内容の充実を図っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「新・今日の作家展」のテーマ設定の経緯について <p>⇒ 開館当初の理念を継承し、現代美術の動向を調査した上で、横浜との関係性や相乗効果を意識してテーマを設定し、学芸会議を経て決定している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アンケートの回収率について <p>⇒ 令和6年度「新・今日の作家展」において、展覧会本体のアンケート回収率は0.76%と低調だが、関連イベントではミニトークが21.4%、対談では95.8%・79.4%と高い回収率を記録。イベントでは座席があり、記入環境が整っているが展覧会では鑑賞後記入するスペースが限られていることが低回収率の一因と考えられる。数年前からQRコードによるウェブ回答も導入しており、記載場所の工夫も含め今後も回収率向上に取り組んでいきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「大人ためのアトリエ講座」の高倍率・高満足度の理由について <p>⇒ 専門的な創作活動を手頃な価格で体験できる点や、初心者向け講座の充実が理由とされる。定番講座もアンケート等を通じて継続的に改善しており、リピーター・初参加者ともに好評を得ている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・展示室の利用率が目標(95%)に届かない理由と今後の対応及びアトリエの利用率が目標に対して低めに設定されている理由について <p>⇒ 展示室は年度初め・お盆・年末年始など利用が少ない時期があり、これが利用率を下げる要因となっている。その時期の活用努力は必要。アトリエは自主展の開催期間などで施設側が押さえる期間があり、利用可能枠が限られる。また、抽選制や荷物を置くロッカー等がなく定期的な教室の開催が難しいことも利用率に影響している。</p>
--	--

(イ)評価

【評価できる点】

- ・広報誌『アートヨコハマ』の60周年記念号(第80号)発行や、ホームページでの情報発信、いりぐちギャラリーの設置などの開館60周年記念事業の

	<p>展開を通じて、市民文化活動の拠点としての存在感を示せたことは大いに評価できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域活動を展開する団体との協働が、市民芸術文化活動の促進に貢献している点を高く評価する。 ・ハブ機能を意識した運営姿勢を高く評価する。 ・現代美術への積極的な取り組み姿勢は、公立施設として意義があり高く評価できる。 ・インタビュー手法や動画の時間短縮、解説において専門性と市民理解のバランスを意識するなど、受け手への配慮が随所に見られ、専門的な内容であっても市民に伝わりやすくする工夫がなされている。 ・従来から大きなテーマとしていたアトリエの利用促進について、利用率が指標を大きく上回った点を評価する。 ・いりぐちギャラリーの新設は、来館者に展示への関心を促す間口として、展示活動の裾野を広げる効果が機能していた。 ・60周年という節目にふさわしく、市民に寄り添った丁寧な貸館事業が展開されており、展示や施設貸出に関する説明やアドバイスもきめ細かく行われていることで、利用者満足度の向上に大きく貢献している。 <p>【更なる取組を期待する点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・明るく迎え入れる雰囲気づくりが、アート活動の導入として重要となるので、受付の配置変更による動線改善は、低コストで市民に優しい工夫として期待される。 ・バス停の標示が分かりにくく、来館者が迷うケースが見受けられるため、規定に抵触しない範囲での標示改善を、関係局と連携して検討・実施してほしい。 ・社会・経済動向・市民ニーズは、今までの60年とこれから未来に向けて変化していくので、これまでの60年の蓄積を活かし、施設の意識や運営の総体的なクオリティ向上を図り、将来にわたって芸術文化活動の拠点としての厚みを増す運営の工夫を期待する。 ・地域連携を通じて、現代美術に馴染みのない層へのアプローチを強化し、草の根的な支持を広げていくことが望まれる。 ・展覧会テーマと60周年的節目との関連性をより明確に伝えると受け手側の満足度がさらに上がるを考える。 ・地域との連携は、現代アートに馴染みのない層へのアプローチの好機であり、魅力を伝えることで施設への共感が草の根的に広がる可能性がある。 ・いりぐちギャラリーは、展示への関心を促す場としての役割を維持しつつ、飲食スペースとしての利用は、バランスを考慮しながら慎重な検討が求められる。 ・SNSの拡充は重要だが、高齢者やアートに関心の薄い層への情報到達には紙媒体も有効となるので、コストと効果のバランスを考慮した多様な発信手法が期待される。 ・企業メセナの動向を踏まえ、支援先としての価値を示すPRや成果のフィードバックを通じて、積極的な資金獲得に努めることが求められる。
--	--

- ・展示室とアトリエの目標値の差が誤解を招く可能性があり、実態に即した指標の工夫が必要。
- ・少子高齢化の進行を踏まえ、単なる利用促進だけでなく、来館しづらい層への配慮や柔軟な運営が求められる。
- ・収蔵品を拡充せず限られたコレクションの活用をしていく施設として、学芸的な企画力が重要であり、少人数でも質の高い運営を維持することが期待される。

イ 「使命3」及び「使命4」について

(ア) 質疑 (以下「・」は委員、「⇒」は指定管理者)

- ・コレクション展関連イベントの応募倍率はどの程度か。

⇒令和6年度のイベントでは、詩人を招いた鑑賞企画を実施。告知後、応募者が少なかったため応募期間を延長し、最終的に定員12名を満たした。令和5年度はオープンワークショップ形式で、通りがかりの来館者が自由に参加できる形態だったため、参加者は11名で倍率は算出されていない。

- ・横浜市こども美術展における市内児童の応募率は。

⇒0~6歳児の応募者数は1,087名で、国勢調査から対象児童総数194,268名に対して約0.56%。小学生の応募者数は437名で、対象児童総数184,790名に対して約0.23%。全体では約0.4%であり、1%未満の応募率となっている。まだ伸びる余地があると捉えている。

- ・ハマキッズ・アートクラブが7月空白期間となっている理由は。

⇒こども美術展の開催準備のため、7月上旬からアトリエが作品受付・保管、ボランティアやインターンの研修、休憩場所として使用される。そのため、貸出やハマキッズの開催が難しい期間となっている。

- ・インタビュー調査はどのような手法で実施しているか。

⇒事業開催時に担当者が紙の質問項目を用意し、来館者に声をかけて立ち話形式で率直な意見を収集する方法を採用している。対象者の反応を見ながら柔軟に対応している。

(イ) 評価

【評価できる点】

- ・次世代への美術関心の継承に注力しており、市民ギャラリーとしての使命を果たしている。
- ・展覧会「コレクションの地層」では、新しい視点や切り口による魅力的な構成が印象深く、運営スタッフの高い専門性と力量によって収蔵作品の活用が効果的に進められており、「ヨコハマ漫画フェスティバル」などを通じて、漫画というポピュラーカルチャーをコレクションとして前面に出したことは、アピール力があり、現代の文化的関心に応える柔軟な姿勢が収蔵作品の認知と市民への浸透が着実に広がっている点も高く評価できる。
- ・学生インターン、中学生の職業体験、市民ボランティアなど、多様な人材育成・参加の機会が提供され、参加者の体験が波及効果を生み、市民の文化活動への関心と参加意欲に繋がっている。

- ・年代に応じた多様なワークショップが専門性の高いスタッフによって展開されており、市民との双方向のコミュニケーションを通じた協働が促進され参加型の文化活動として評価できる。
- ・収蔵庫やバックヤードを巡る「まるごと探検ツアー」は、子どもたちにとって貴重な体験となっており、応募倍率も一定の人気を示していることから、教育的価値と魅力のあるプログラムとして評価する。
- ・インタビュー調査による来館者の声の収集において、立ち話形式で来館者の率直な意見を聞くという手法は、ミュージアムのアーカイブとして非常に価値がある取り組みであると評価する。

【更なる取組を期待する点】

- ・収蔵作品の修復や収蔵庫の改善は、市民の文化財を守る重要な課題であり、横浜市との協働を継続し、積極的かつ計画的な取り組みが期待される。
- ・ワークショップの参加対象をより多様な層へ広げる工夫や、これまでの蓄積を活かしつつ、年齢や背景の異なる市民が芸術文化に触れられるようプログラムの拡充を期待したい。
- ・所蔵作品をより積極的に公開・活用し、漫画文化に関心のある層への訴求を強化することが期待される。
- ・福島瑞穂氏（女子美）、布施琳太郎氏（東京芸大）など、作家の出身校を手がかりに、学生層へのアプローチを強化することで大学との連携やターゲット広告の実施などのより戦略的な広報を期待する。
- ・未公開インタビューの活用方法の検討について、何らかの形で活用できる方法を模索することが望まれる。
- ・子どもの美術展の応募率向上に向けた施策として、応募率が市内児童の1%未満にとどまっている現状を踏まえ、今後はより多くの児童・保護者に届くような広報や参加促進策の検討が求められる。

ウ 「使命5」「使命6」及び「その他」について

(ア) 質疑（以下「・」は委員、「⇒」は指定管理者）

- ・自衛消防隊の活動と役割を確認したい。

⇒自衛消防隊は財団職員と施設管理スタッフで構成され、災害発生時に消防機関が到着するまでの初動対応を担う組織となっている。年2回の防災訓練や日常点検を実施している。

- ・人件費の決算額が予算額より少なかった理由と業務への影響について

⇒予算策定期には前年度の職位・職制に基づく平均単価で算出しているが、

決算時には実際に配置された職員の人件費で計算されるため差額が生じた。特に若年層の職員が多く配置されたことが要因である。業務への影響については、経験のある職員が若手を支援する体制を整えており、影響は最小限に抑えられている。

- ・設備保全費の決算額が予算額より少なかった理由と業務への影響について

⇒展示室壁面の改修費として予算化していた委託費を、急なプリンター故障への対応として備品購入に充てたため差額が生じた。法定点検は滞りなく

	<p>実施されており、改修費の削減による施設への影響は、展示室壁面を職員がレタッチするなどで補修対応を行った。</p> <p>(イ) 評価</p> <p>【評価できる点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自主収入が目標値を上回ったことを高く評価したい。 ・限られた予算内で優先順位をつけた施設管理の工夫が見られる点は評価できる。 ・コロナ対策を含む感染症への対応が徹底されており、参加者の安全確保に努めている点を評価する。 ・事故もなく施設設備の良好な維持管理ができている。 <p>【更なる取組を期待する点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他市で実施している市民が文化施設を応援する仕組みを参考に、市民参画の可能性を柔軟に検討してほしい。市民が資金面でも文化施設の運営に関与することで、施設への愛着や主体性が高まると考えられる ・少人数の参加であっても、芸術文化の拠点としての意義深い取り組みは高く評価されるべきであり、数値にとらわれすぎず、事業の質や文化的価値を重視した柔軟な評価が望まれる。 ・消防団との連携により、地域とのコミュニケーションの機会や新たな来館者の創出につながる可能性がある。今後、連携の可能性を探ることも検討に値する。 ・施設の立地条件を踏まえた独自の帰宅困難者対応のシミュレーションの検討を期待する。 ・少子高齢化への対応として、認知症プログラムなどの取組に知見が蓄積されている事例を参考に、意識的な対応が求められる。 ・今後も新たな感染症などに備え、常にアンテナを高くして安全な施設運営を継続してほしい。 ・予め設備の老朽化を踏まえた予算計上が望ましい。 ・多様な資源の確保に向けては、支援者への訴求力が重要であり、その基盤となるのは利用者数の拡大である。良い取り組みを広く届けるためにも多様な来館者の獲得が望ましく、更なる努力を望みたい。 <p>エ 「総括」について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体として、着実な運営と随所に工夫・専門性が見られ、高く評価できる。 ・「いりぐちギャラリー」の取組において、来場者への温かみあるメッセージが伝わっており、双方向のコミュニケーションが感じられ、鑑賞センターによる冊子とギャラリー冊子が対になっていることも、市民ギャラリ一らしい一体感がある。 ・運営スタッフの待遇やモチベーション向上も含め、来場者と運営側双方の意欲を高めることが、施設の持続可能性につながる。 ・公立施設としての公益性を踏まえ、展覧会企画において社会課題の解決に
--	--

	<p>資するテーマ（例：貧困、育児、少子高齢化、地球温暖化など）とした企画は一定の意義が認められるものであり、今後、現代的な社会テーマを意識した企画立案も期待したい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アクセス面の課題については、他館でも同様の悩みがあり、立地条件を踏まえた工夫が求められる。 ・開館60周年を迎えるにあたり、市民の記憶に根付いた存在としての意義を再確認。アートは生活を豊かにするものであり、横浜市民の暮らしに寄り添う存在として今後も継続してほしい。 ・少人数体制・立地のハンデを抱えながらも最大限の資源活用をした地道な努力が感じられ、今後はその成果をいかに効果的に見せていくかが次のステップとなる。 <p>5　まとめ</p> <p>本日の委員会で確認した内容を踏まえ、各委員は評価シートを見直し、事務局で調整のうえ、委員会の最終評価内容としてまとめることとする。</p>
審議結果	<p>「議題：令和6年度業務評価」について、本日の委員会で確認した内容を踏まえ、各委員は評価シートを改めて清書し、事務局で調整の上、委員会の最終評価内容としてまとめることとする。</p> <p>また、議事録については委員長確認後に確定のうえ、公表する。</p>